

参考資料

分類名〔病害虫〕

参 19	ダイズサヤタマバエによる被害リスクと防除対策
------	------------------------

宮城県古川農業試験場

要約

開花期が遅い大豆（晩生品種）の晩播栽培は、標播栽培と比較してダイズサヤタマバエの被害が多くなるリスクがあり、防除対策としてエトフェンプロックス乳剤やジノテフラン液剤が有効である。

普及対象：大豆栽培農家
普及想定地域：県内全域

1 取り上げた理由

水田転換畑においてダイズの栽培面積が増加したことに伴い、ダイズの害虫相にも変化が見られており、近年はダイズサヤタマバエによる被害が少ない状況となっている。しかし、近県において本種による多発事例が確認されていることから、今後の発生動向について注視する必要があると考えられた。そこで本種の発生実態を調査し、被害リスクについて明らかにするとともに、防除対策についても明らかにしたので参考資料とする。

2 参考資料

- (1) 開花期が遅い大豆品種「ミヤギシロメ（早晩性：晩生）」の晩播栽培は、標播栽培と比較してダイズサヤタマバエの被害が多くなるリスクがある（図1、表1、写真1）。
- (2) ダイズサヤタマバエに対する防除薬剤として、エトフェンプロックス乳剤（商品名：トレボン乳剤）やジノテフラン液剤（商品名：スタークル液剤10）が有効である（図2、表2、3）。

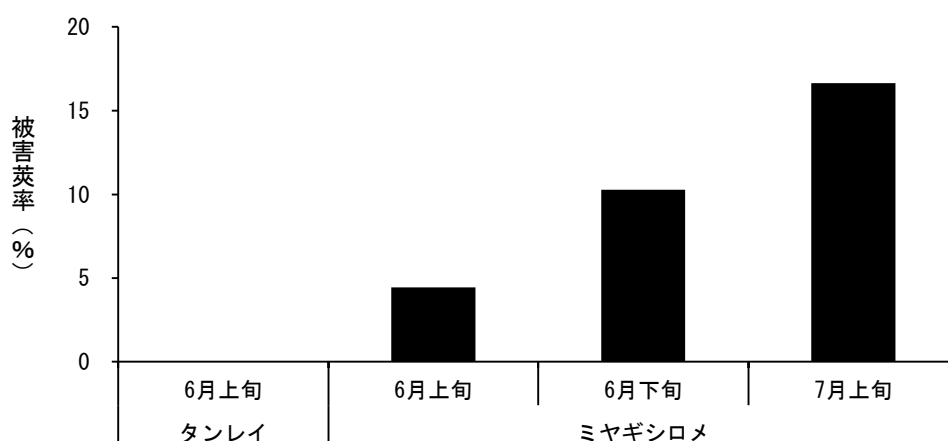


図1 品種・播種期とダイズサヤタマバエの被害の関係（令和5年）

注1）横軸の月・旬は、播種期を示す。

注2）開花期 タンレイ（6月上旬）：7/24、ミヤギシロメ（6月上旬）：7/28

ミヤギシロメ（6月下旬）：8/10、ミヤギシロメ（7月上旬）：8/15

注3）区の面積・区制：68m²、連性なし

注4）調査茎数（調査莢数）：10茎（全莢）

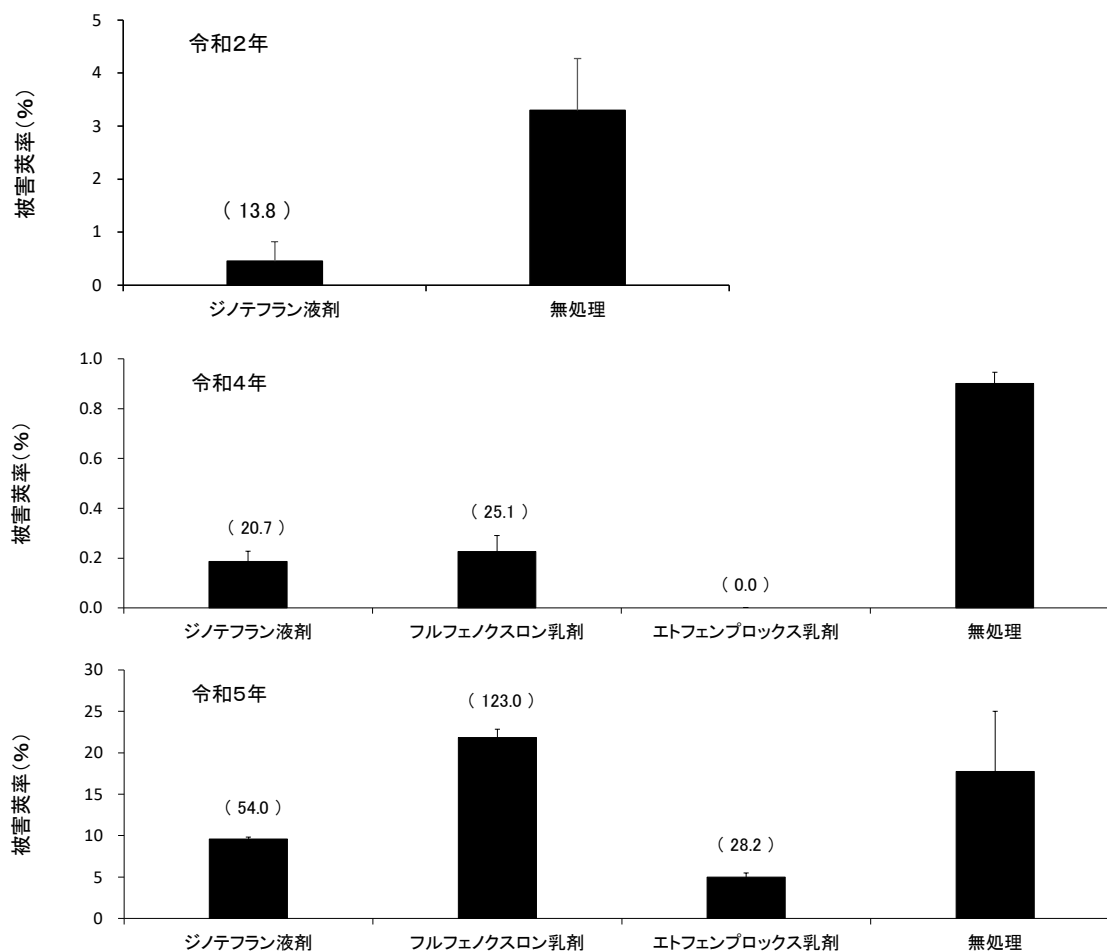


図2 ダイズサヤマバエに対する各種殺虫剤の効果（令和2、4、5年）

注1）かっこ内の数字：無処理比、図中の縦棒：標準誤差

注2）処理方法

希釈倍数：ジノテフラン液剤 1,000 倍、フルフェノクスロン乳剤 4,000 倍、
エトフェンプロックス乳剤：希釈倍数 1,000 倍

散布量：150L/10a

散布時期：令和2年 開花期 5 日後＋開花期 12 日後

令和4年 開花期 7 日後＋開花期 13 日後

令和5年 開花期 7 日後＋開花期 12 日後

注3）区の面積・区制：令和2年 27m²/区・3 連性、令和4年 32m²/区・2 連性、
令和5年 20m²/区・2 連性

注4）調査茎数（調査莢数）：10 茎/区（令和2、4年全莢、令和5年 600 莢/区）

3 利活用の留意点

- (1) 極早生から中生のエダマメに寄生する次世代のダイズサヤマバエが、ダイズや晩生のエダマメに寄生すると考えられる。また、ダイズや晩生のエダマメにおける被害率は、開花期が遅いほど高くなる傾向がある（図3）。
- (2) ダイズサヤマバエの防除適期は若莢期であることから、開花後期～莢伸長期に薬剤散布を1～2回実施する。薬剤の使用に当たっては、最新の登録情報を確認する。
- (3) 県内におけるダイズサヤマバエの被害率は、令和5年 1.0%、平年値（平成25年～令和4年の平均）0.7%であり、被害は少ない傾向にある（病害虫防除所の巡回調査結果）。
- (4) 「ミヤギシロメ」の晩播栽培は、タバコガ類幼虫の発生密度が高くなるリスクがある（普及に移す技術第94号参考資料参照）。

（問い合わせ先：宮城県古川農業試験場作物環境部 電話 0229-26-5107）

4 背景となった主要な試験研究の概要

(1) 試験研究課題名及び研究期間

土地利用型農業経営における病害虫リスク管理と防除技術の確立（令和元年～令和5年度）
農作物病害虫防除等の新農薬並びに新肥料資材効果確認試験（令和2年度）

(2) 参考データ



写真1 ダイズサヤタマバエの幼虫（左）と被害莢（右）

注）右の写真の説明

左から1 莢目：本種の被害なし、2～5 莢目：本種の被害莢

2 莢目：子実の成長が停止（2粒とも被害）、3 莢目：莢の一部が奇形、4～5 莢目：莢の成長が停止

表1 トレボン乳剤のダイズにおける使用方法(令和6年2月現在)

作物名	適用病害虫	希釈倍数	散布液量	使用方法	使用時期	本剤の使用回数	エトフェンプロックスを含む農薬の総使用回数
だいず	ダイズサヤタマバエ アブラムシ類 ツメクサガ カメムシ類 フタスジヒメハムシ シロイチモジマダラメイガ ウコンノメイガ アズキノメイガ マメシクイガ ウラナミシジミ ハスモンヨトウ	1000倍	100～300 リットル/10a	散布	収穫14日前 まで	2回以内	2回以内

表2 スタークル液剤10のダイズにおける使用方法(令和6年2月現在)

作物名	適用病害虫	希釈倍数	散布液量	使用方法	使用時期	本剤の使用回数	ジノテフランを含む農薬の総使用回数
だいず	ダイズサヤタマバエ フタスジヒメハムシ カメムシ類	1000倍	100～300 リットル/10a	散布	収穫7日前 まで	2回以内	3回以内(但し、は種時の土壌混和は1回以内、散布、空中散布、無人航空機散布は合計2回以内)
		8倍	0.8 リットル/10a	無人航空機 による散布 空中散布			

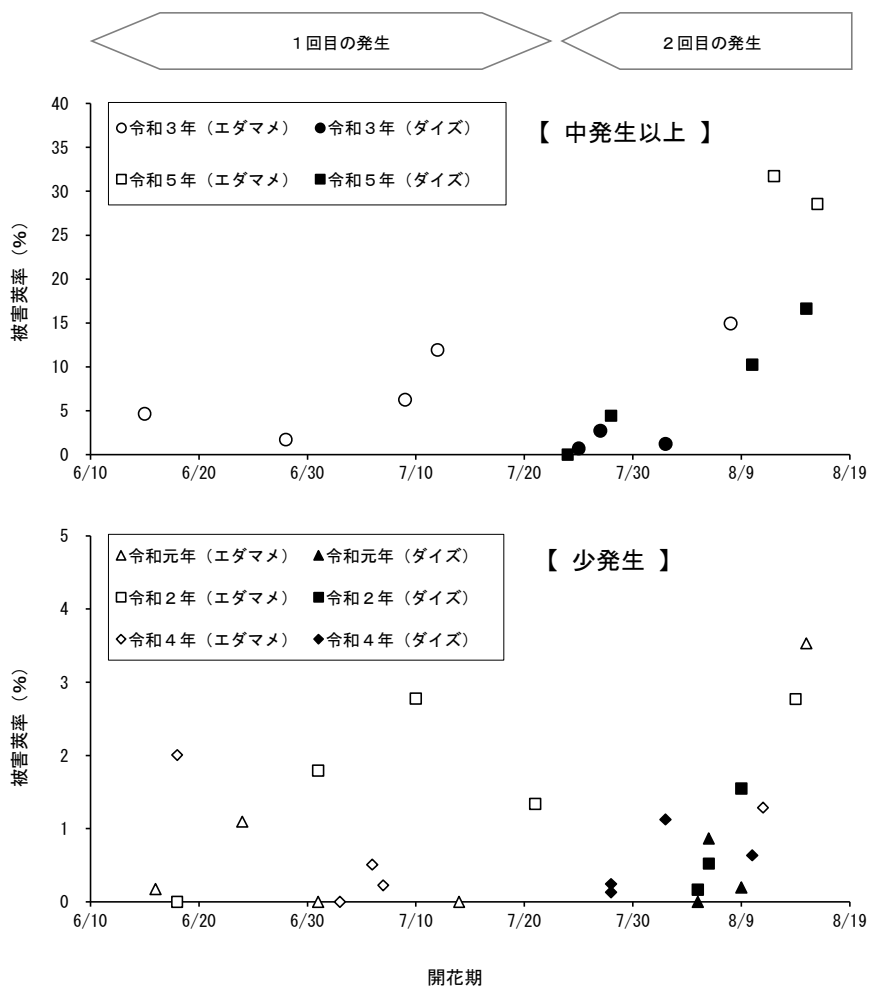


図 3 開花期とダイズサヤタマバエによる被害の関係（令和元～5年）

注 1) 区的面積：令和元年 30m²/区、令和 2～4 年 53m²/区、令和 5 年 68m²/区
 区制：連性なし（令和元～5年）

注 2) 調査茎数（調査莢数）：10 茎/区（全莢）

(3) 発表論文等

イ 関連する普及に移す技術

- (イ) ダイズほ場におけるタバコガ類幼虫の発生消長（第 94 号参考資料）
- (ロ) 大規模水田転作ダイズにおける害虫被害の発生実態（第 82 号参考資料）
- (ハ) ダイズサヤタマバエの第Ⅱ回世代からの被害量予測（第 73 号参考資料）
- ロ その他

(4) 共同研究機関

なし